

香車

第五輯 · 十月號

大正十五年九月二十日印刷・大正十五年十月一日發行 第一卷 第五號



三野湯池

蛙
蛙

文地 空 おれ

まろ

まろ まろ

まつぶくれて

おれは冬ひと冬眠つてみたい

人間の脳味噌に小便をしゃけろ

土とひとつに眠って

高瀬勝男

飯すぎの自分は氣輕に口笛——吹き吹く

稲葉ざゝと刷るなり

わらしりの頬赤くも照った夕焼ぞ

あるく自分にまた一日の労水

口笛と共に消えぬ雨晴の空

——健やかにあけろき

満岡忠成

意志

アラユル尖端ハ

トソガッタ

カタマレ ススメ

ツキ ツキ ツキイッテ

鋼ヲブチワルンダ!!

中野 勇雄

秋の詩 十三号

さやさやと揺れる草路は
ゆつくり歩いてゆきな
赤トンボを肩章にして

(九月十七日)

秋の詩 大号

赤トンボ

赤トンボ

空は浜辺だ

柿田 重子

喘ぎ

滑らかな砂石

私を

そつと吸ひ寄せて

研ぐ 研ぐ 研ぐ

私は

顔を歪める——歪めて笑ふ——聲を
殺して笑ふ

段塚青一

黄色っぽい月

ピロ　ピロ

月が黄色っぽい脚を振る
つるつる　まるまっこの膝を見せて

松村きよむ

○
真夜中に匂ふ煙草のけむが
無性になつかしい禁煙者を訪れる

——片隅で味った煙草のうまさ
が夢のやうに遠く遠くわたしをさしまねいておた——

こくん　こくんとつばをのみ下し
自分自身の奇僻に哄笑を沸騰させ
くッ　くッ　くツとけたものになつた
聲帯をあめん棒みたいにしやぶる

——片隅で味った煙草のうまさ
が夢のやうにとほくとほくわたしをさしまねいてある——

石川武夫

秋

空澄み

電線 目を貫き

蜻蛉の羽をきる

月のある夜

虫の音に

霧ふかいので

隣の時計を教へながら

遠い世界へ沈んでしまふ

江口隼人

夏

野中の小川で

水を浴びる小娘達を見た

その黒い足、黒いシリ、

ばったのやうにぞんぐりかへつて

あ、鮮かな昼である

鮮かな雲である。

子供と犬とミルクの話

朝

犬が子供をみつばった

着物の裾が切れるほどに

ツーツー牛乳と子供が泣いてゐる

赤鬼はじつさい、もう止めてくれ、と思つて

ゐるに相違ない

だが、こいつらは小犬なのだ

余は頬を振らうと思つてゐる
はたはたと風になびく
小犬よ

子供達とミルクよ

余の赤い旗を見なさい

高々と中天にひるがへうてゐる

あ、お日様が昇らうとする

あの山の上に

(清新なる大氣より)

小林 賢

詩ニツ

○

とろとろ
とまとが

真紅だ

みな真紅に光ってゐる

○

ことごと、ことごと

いいお月夜だ

赤い帯の娘が太根を
きざんでる。
叩いてゐる

栗田 不羈夫

正 午

市街で正午の鐘がなり出した

雨あがりの街はづれに

五月の光はエナメルのように

私一人が道を歩んでゐる

眼に心に

あちこち五月の感覚は飛び込んだ

カーンカーン市街の鐘は鳴ってゐる

中野大次郎

詩 三 篇

○

まつ白だ

水浴び歸りの子供が

海軍をふきあげたのか

空いちめん

ひつついて海のはひを

たゞよはせて流れてゐる

風・蝙蝠。

○

透明な燦爛体であり

星一つなき夜の華かな街の

一本のマツチの棒のさきでコホロキがぶつくり甦つてゐる

○

緑色のメランコリーを消滅する一瞬遠かなる街の

灯を笑ひつぶした月のことを夢に

見るほどの夜空である。

✓
愛

ねぢられて
ねぢられて

眞直に伸び上った

竹とんぼ

子供の眼と指先とが
あつたかくふるへてゐる

あらじのよる

くらやみといふに

ほのぼのとまんまるい　しよくだいのひかり

みつめると　みつめると

きいろいゆめがわを急がく

ゆらぐかげに　てのひらをあつめ

ゆたかなるちからのみびき

しづかなるころのいのり

高橋水聲

詩三篇

○

まつかたとさかをかんぶして
夜つひて踊りまわる鶏なのか

處女^{をとめ}は賣笑^{コケウ}婦^トとかはり

くらがりへすひこまれ

よれよれの上はつついた足どりは

満身の淫樂をみせしめてゐる

秋風

さわざわと

穂先に絡み、秋風は立て

稲葉に宿る夫婦^{めとよ}蛭^{むし}の

つるみは重し

○

あんあ

をんなよ！

おほきなあくびは

うんとおうやうにやるがいいのです

編輯後記

▼ どしッ どしッ と大地を踏みつけ、踏みしめる。こころ
一めんのうれしさが、東から西から、南から北から、むく
むく、むく、止つてくる。
おー、なんといいふ、カブさだ。
▼ 秋、全詩話会として、地方詩話会、人から快く寄稿して
くれた各位の御援助を、殊にうれしく御礼を申し上げて
おきます。
▼ 天高く馬肥ゆるといふ。幸すなる哉、諸兄諸姉の白重自
愛、益々進々のほどを著して止まない。
▼ 編輯上に於て松本兄の大なる労ひに預り、特に感謝の意あり
其の他
去る九月四日、全詩話会をウエカフエー階上に於て開く。
尚、次詩話会は十月三日（会場は平町柴田邸・午前八時より）
近日中「乾杯群」復活、期待の大なるほどに待つて遠しい。

「寄贈誌」多謝

次島原稿締切十月十五日確定

1926.10. 香車五輯

大正十五年九月三十日印刷
大正十五年十月一日發行

編輯兼 發行者 高橋水聲

福島縣石城郡赤井村田町
發行所 香車詩社

文藝雑誌

陽群

—— 第十輯秋季號 ——

執筆者

イナガキ・夕ル木
段 塚 青 瀧 一
黄 島 田 芳 文
田 邊 若 男
多 賀 圭 三 郎
白 鳩 妙 子
藤 本 月 助
中 島 秀 彦
小 野 小 夜 子

發行所

岡山縣・味野町・群像社



香車

一九二六年・十二月 版

第六號

